

日本 NIE 学会第 10 回愛知大会の役割

土屋 武志
(実行委員会 事務局長)

今年、学校とジャーナリズムの関係を考えさせる出来事があった。一月末に出された「大津市立中学校におけるいじめに関する第三者調査委員会の報告書」である。同報告書では、学校や教育委員会の中で相互の情報共有が無かったこと、さらに、情報を責任もって処理するシステムが不備であったことが指摘された。同時にメディア倫理も厳しく問われた。同報告書は提言の最後を「若手記者のみなさんへ」というメッセージで終えている。記者としての自分の立ち位置をしっかりと持つてほしいと指摘したうえで、「報道は、人を喜ばせもするし、傷つけもする」そのことを改めて肝に銘じてほしいと述べている。さらに「報道は、事実を正確に伝え、そのことによつて社会をよりよい方向に進ませることが使命である」として、情報を適切に判断し方向性を見定めて社会を動かす専門性を記者に期待している。つまり、報道が子どもの人権を侵害したり問題をこじらせ解決を阻害することのないように、報道に携わるものの専門性確立が期待されたのである。この問題は、報道に携わる記者だけに課される問題だろうか。

日本 NIE 学会第 10 回愛知大会では、

「真価問われるデジタル時代の NIE — 価値ある情報を教育に —」というテーマでシンポジウムを開く。つまり、質の高い情報を見分け、自分自身の考えを多面的・多角的に組み立てることが出来る大人をどう育てるかである。それは、質の高い市民（読者）を如何に育てるかという問いでもある。

シンポジストの大谷昭宏氏は、東日本大震災後、数え切れないくらい多くの原発関係のシンポジウムに呼ばれた。大谷氏は、「現状を容認するわけではないが、できることなら原発はない方がまし。すべての原発をつぶせとはいわないが、今のままでいいとは思っていない」これが自身のスタンスだという。ところが、そのスタンスつまり原発反対の立場を伝えるとシンポジウムの依頼は百パーセント断られたという。これは、震災直後、マスメディアの多くが電力会社側からの情報に頼り、原発事故によつて引き起こされていることを正確に伝えることができなかったという反省を込めた文脈での話である（大谷昭宏・藤井誠二『権力にダメされないための事件ニュースの見方』河出書房新社 2013）。出来事を多面的・多角的に報道する専門的能力が報道側にもなかったことと、そ

の受け手である市民の側にもそのような視点がないことに気づかされるエピソードである。

シンポジストの一人である市川正孝氏は、教師としての自身の NIE 実践を踏まえて、今の NIE に「メディアの批判的受容能力」を育成する単元や教材が必要だという。それは、複数の記事の読み比べとともに学習者である子どもたちの考えを新聞社に伝えることによる「双方向性」が必要だという（市川正孝『新聞教育』を創る — 授業づくりの方法と可能性 — 『学文社 2013』。新聞を使って学んだことを新聞のつくり手につたえることにより新聞の質も高まるという。これは、子どもを単なる情報の受け手としてとらえる見方でなく、情報を評価し発信する主体者として育てるという考えである。市川氏は、この点を自覚して NIE 実践が進められることが重要であると指摘している。

国語教育研究者の羽田潤氏は、大会のもう一人のシンポジストである。氏は、大学生に公共広告をつくらせる実践を行った。この学習は、鉄腕アトムの動画の一部分を組み合わせ CM をつくる過程で、学生を情報を発信する側に擬似的

に立たせている。氏によれば①鉄腕アトムという物語の内容読解、②その表現手法の理解、③公共広告機構CMの内容読解、④その表現手法の理解という四つの学習活動を踏まえて、⑤自分自身が発信する公共広告として再構成するという「きわめて高度なリテラシー」が要求されるという（羽田潤『国語科教育における動画リテラシー教授法の研究』溪水社、2008）。氏は、メディアリテラシーを育てるために「メディアで表現すること」と「メディアを評価すること」という二つの到達目標が重要なことをイギリスの事例や自身の実践から具体的に提案している。

羽田氏の場合、動画という手段ではあるが、市川氏がいうNIEに必要な「双方向性」と共通する見方といえる。つまり、メディアは異なっても、そこで学ばれるべきリテラシーは共通している。情報は、単に受け取るだけのものではないのである。

NIEは、教育の専門職である教師と報道の専門職である記者が協働して子どもたちに社会を見る目を育てる方法である。それは子どもたちが幸せに育つために大人たちが責任を持って行う支援である。しかし現実の日本社会は、子どもた

ちが幸せであるのか疑問に思えるデータが多い。ユニセフが先進国を対象に行った調査結果が二〇一〇年三月に出され、「子どもの幸福度調査」として短いニュースになった。その報告書の中で、日本の子どもたちが他の先進諸国に抜きんで高い割合で回答した項目が「孤独感」である。十五歳の日本の子どもたちの三割が孤独だと答えている。調査対象となったOECD加盟国二十四カ国中日本以外では一割未満という中で日本だけ突出しているのである。日本の子どもたちの三人に一人ぐらいの割合で孤独感に包まれているのである。今日本の学校で、子どもたちが協力し合って学習を進める協働的学習方法が重視されている背景にはこのような現実がある。このような社会状況の中、NIEで取り組まれる学習活動は、児童・生徒同士が、情報をもとに関わり、対話や文章で考えを深め合う場面が多く見られる。NIEは、子どもたちにコミュニケーションの機会を増やし、孤独な子どもを減らすことにつながっている。

しかしながら、NIEは、単なるコミュニケーション活動ではない。日本NIE学会第10回愛知大会大会では、最も若いシンポジストとしてタレントの春香クリス

ティーン氏を招く。彼女は、十六歳の時にスイスから日本に来たとき、日本の高校生が政治や社会のことにあまりにも無関心で驚いたという。「興味がないのはなぜ」と不思議に思った彼女は、日本の政治を知りたくなり、国会を見学したり政治家カルタづくりをして日本の政治への興味を深めた。最近も「若者よ選挙に行こう」という趣旨のイベントにゲストとして行ったら、参加者全員が五十歳以上だったことから、「なぜ若い人は政治に興味を持たないのか」という疑問をさらに強めている（春香クリスティーン『永田町大好き！春香クリスティーンのおもしろい政治ジャパン』マガジンハウス2013）。彼女のような若い世代が、情報を組み立て、社会的関心を高めるうえで新聞を必要としているか、若い世代の声をもとに未来を考え、確かな情報化社会とどのような社会なのか、参加者相互の対話を通じて方向性を定めることも大会の役割である。